



50 周年の節目に思う

日本光学会幹事長 山本 公明

(オリンパス光学工業(株))

日本光学会は本年4月1日をもって、前身である光学懇話会の設立から数えて満50年を迎えました。設立から半世紀を経て、まさに知命のときに入ったと悟るべきでしょうか。学会を取り巻く外部環境は急激な変化の中にあります。改めて自らの存在価値や使命を新しい理念やビジョンの下に再構築・再確認し、出発する必要性を感じます。昨年度日本光学会内に設置された「将来計画委員会」では、筆者はこのような意思を込め活動してきましたが、今、重責を負うに至り思いの一端を述べてみたいと思います。

前述のように、急激な外部変化の中で、学会の果たすべき役割は従前にも増して大きくなっていると認識されます。国の競争力が知的生産活動の効率に大きく左右される時代の中で、知的活動や知識流通の場を提供する学会組織は、本来、最もダイナミックな活動を要請されている組織と考えられます。それとともに、日本が縦社会の構造から横社会の構造をも取り込む必要が出てきた状況や、独創と共創の時代でもあることを考えると、横組織としての学会の役割の重要性を強く感じます。

また、高説をかりれば、主観的な暗黙知と客観的な形式知の循環が知識創造のためには必要とされます。とすれば、そのような多様な知をいかに有機的に媒介・結合させる学会となりうるか、そのための新たなメカニズムや環境の整備が本学会として問われているのではないのでしょうか。「将来計画委員会」において示したビジョンは「光学および関連分野の知が創出・生成、蓄積・共有、流通、移転・変換される活動がダイナミックに展開され、世界の光科学、光技術および光産業の発展に大きく貢献し魅力と存在感のある学会組織」です。この文言は常套句の響きを与えるかもしれませんが、その意味するところを確認し共有するところに新たな飛躍が生まれると信じております。どうぞ会員各位におかれましてはその含意あるところをご賢察いただきたく存じます。

次にもうひとつ強調したいことがあります。それは日本光学会の魅力や行動力の源泉に触れてのことです。「少なくとも学べば、すなわち壮にして為すことあり。壮にして学べば、すなわち老いて衰えず。老いて学べば、すなわち死して朽ちず」という言葉があります。日本光学会には会員相互の研鑽に資する多くの知的、人的資源が存在します。そこには単なる専門分野の知識だけでなく、多くのすぐれた知恵があります。会員各位が相互に交わり、研鑽し、知的好奇心を触発させるような学会活動こそ魅力ある学会の原点のような気がしますがいかがでしょうか。

日本の総合的国際競争力が世界26位に後退した現実や、外部環境の厳しさを直視し、21世紀における光科学技術の重要性を認識するとき、日本光学会の果たすべき使命や社会的責任は、50年の歴史を経た今日、ますます大きいと思います。会員各位がビジョンと理念を共有し、本学会が世界の光科学技術、産業に多大の貢献ができることを願わずにはおられません。情報通信、生命科学、エネルギー、環境など、現代の社会が要請する重要分野における活動の活性化やフロンティア領域の開拓に挑戦し、諸先輩が築いてきた本学会50年の歴史とその重みをいっそう発展推進させるべく、力強く歩んでいこうではありませんか。